

令和3年5月10日

第66号

柳川郷土研究会  
季刊誌

# 瓦版

発行所 柳川郷土研究会  
編集 塩塚 純夫



## 生きる仲間同志

火

み

埋

鎮守の森は楽しかった。しめ縄をめぐらした大きな御神木のまわりで過ごした幼い日のことは、今でも忘れられない。かつての田園は姿を消し、あたりの景色も一変したが、鎮守の森も、御神木も、昔のままに残されていた。

近年、一部ではやたらに樹木を切り倒し、ブルドーザーで自然を破壊し続けてきた。この世界は人間だけのものであつて、人間は生きるものの中の王者だと思いがかり、自らの欲望のために、これらの無抵抗な生きものを殺してきた。樹木は、ドォーと大きな音をたて、倒れ伏していった。

私にはその音が、人をのろう怨念の叫びのように思えてならない。

私たちの先人は、亭々(ていいてい)とそびえる木を神木とてあがめた。神が宿り給うという畏敬の心さえもつてこれを大切にしてきた。

春とともに、草木が芽を吹き、花を咲かせてくれる。有難う、仲間たちよ、共に生きてゆこう。

自宅の裏庭に挿し木で大きく育った椿が、真っ赤と白のマダラ模様の見事な大輪の花を咲かせました。椿の小枝を切つて表庭の木に乗せてやると、「こんな木に椿の花が咲いている」と多くの人から見てもらい、ほめてもらっています。私はうれしくて椿に「ありがとう」と話しかけています。(武末十治男)